

多文化共生を目指した継続的対話の場の試み

丸山樹里 杉原由美 中河和子 オーリ・リチャ
荒木華英 笠原真美

1. 背景

現在の日本社会では定住外国人が増加しており、まさに多文化社会が現実のものとなろうとしている。しかし、現実にはすみ分けがなされており、多文化間の接触の機会すら少なく、多文化共生とはとても言いがたい状況である。また、日本社会は異質性が認められにくく、民族的なマイノリティである多くの外国人がこの社会に対して居心地の悪さを感じているのはもちろん、さまざまな点でこの社会から「異質」とされることに不満を持っている人は外国人・日本人を問わず少なくない。真の共生社会を目指すためには、異なる背景を持つ者同志が出会い、お互いを知ってその存在を認め合い、お互いから学ぶことによって共にすみよい社会を作っていこうとする姿勢が求められる。

Berry (1997)、岡崎 (2001) はこうした姿勢を多文化ストラテジー、mutual accommodation (相互歩み寄りの精神) と呼んでいる。多文化ストラテジーとは、一つの社会に複数存在する言語や文化を肯定的に受け止め、また、その社会に住む異なる言語や文化を持つ者同志がお互いを理解し合い、尊重するためのストラテジーである。mutual accommodation を目指すには、ある文化を持つ者だけが支配的になるのではなく、それぞれが対等に学びあうという多方向の学びが必要である。多文化社会への移行が予測される21世紀では、多文化社会の実現につれて生じる問題にどう関わるかは大きな課題である。このような現状を踏まえ、多様な文化背景を持った人が相互に学びあう場として多文化交流型のプログラムを設定した。

2. 目的

本試みは、2000年7月に、本大学院人間文化日本語教育コースで実施された8日間の集中クラス「言語と文化の交流クラス」(岡崎他 (2001) 参照) を出発点として始まったものである。このクラスでの参加者の言動から、日本人・外国人を問わず、地域社会で生きていくことにおいて様々な問題を抱え、そうした問題を共有する場を必要としていることが浮かび上がってきた。特に外国人には、「言語的な障壁に加えて、精神的障壁 (自信が持てないなど)、物理的障壁 (母語話者との接触がないなど)、社会的障壁 (偏見など) が存在する」^(註1) (Wallerstein 1983) ことから、問題は切実なものになっていると言える。

そこで、日本人=教える人、外国人=教えられる人という従来の構図を超えて、出身や性別、年齢など様々な文化背景を持った人が集まって (【表1】参照)、共に学びあいながら、地域社会で自分を表現し行動できる力を作る足がかりになるような場を設定した。この場では、ブラジルの成人識字教育者 Paulo Freire のアプローチである「Problem-posing (問題提起学習)」^(註2) を参考に、個人が問題に感じていることや、みんなに話したいことなどの「トピック」を持ち寄り、お互いに意見を交換しながら学んでいくことを目指す「話題提起」の方法を取った。また、一個人として一過性でない「継続的な対話」を重ね、その対話の積み重ねからそれぞれにとって実感のある多文化間交流を行おうという目的から、1回2時間、隔週の割合で行ってきた。(【表2】参照)

本報告書では、全9回に対する評価インタビューから、「参加者がこの場から何を得たのか」また「その要因は何か」について分析し、その結果を考察する。

【表1】参加者の背景

出身	イラン、インド、韓国、中国、フィリピン（滞日5-14年）、日本
年代	30代～70代
性別	女性8名 男性1名
職業	専業主婦、会社経営者、元会社員、派遣社員、学生

【表2】全9回の内容

	日にち	話題提起者	トピック
1	11/21	なし	茶話会
2	12/5	A（韓国）	日本に来て驚いたこと（交通ルール）
3	12/19	B（日本）	主人という言葉
4	1/9	C（日本/スタッフ）	言葉が通じないということ
5	1/23	D（イラン）	テレビの与える影響
6	2/6	E（日本）	風習・習慣に従う必要があるのか
7	2/27	F（中国）	日本語でうまく表現できない時
8	3/13	G（日本）	ボランティア経験
9	3/27	H（フィリピン）	子供の教育

3. 活動

毎回の活動は次のような手順で行われた。まず、初回にそれぞれの回の話題提起担当者を決め、活動日の1週間前に「話したいこと」をスタッフに提示してもらう。話題の提起は、聞き取り、または文書提出で行う。その後、スタッフミーティングで話題について検討し、参加者の対話・話し合いを異文化の強調など表層的なものに終わらせず、なるべく個々人の問題にひきつけて深く話し合えるための工夫をする。具体的に言えば、話し合い等を活性化させるために、socio drama^(註3)、ゲームの設定などを計画・準備するなどである。

活動当日は、まず最初に担当者から全体に話題を提起してもらい、その話題をみんなによく理解してもらえるように質問を受けたり、絵や写真などを使って説明を加えてもらう。そして、その後スタッフミーティングでの方向性をもとに対話を行う。最後に、その活動で感じたことや考えたことを出し合う時間を設ける。

以下、第6回目を例にとって活動を具体的に見ていく。

<具体例：第6回>

この回に参加者Eさんから提起された問題は、「日本人から見ても、ちょっと変だと思ふ風習・儀式」というものだった。要約すると、「新婚の友人が、楽しみにしていた夫との温泉旅行を、遠い親戚の子どもの七五三祝いに出席するために無理やりキャンセルさせられた。また、そのお祝いは結婚式並に派手にやるので、お金も大量にかかりとても不本意だった」というもの。Eさんは、「東京に住む私達から見たら、なんて見栄っ張りなクダナイ行事なんだろうと思います。諸外国にはそういう行事があるのでしょうか？ととても知りたいと思います。」と提起理由を述べている。

この話題についてスタッフミーティングで話し合った結果、以下の問題が指摘された。

- A. 「このままこの提案を話し合いのまな板の上ののせれば、各国の“くだらない”習慣についての話に終わってしまう可能性がある」
- B. 「この問題は本当にくだらないと言い切ってもいいのか」
- C. 「『Eさんの友人の怒り』『問題提起者の提起意図』の裏にあるものは何か」

実際の活動案としては、まず各国の習慣について紹介し話し合うという提起者の要望に応える活動をし、その後に主に上記C. を探るため、socio dramaを計画した。socio dramaの体験、またその後の対話によって「新

しい発見をする」ことが、スタッフが期待していた点だった。

この日の流れは【表3】の通りである。まず最初に、担当のEさんから先のエピソードが話された。そのあと、子どもの写真などで「七五三」についての説明があった。また、各国の子どもに関するお祝い行事やそれに関わるエピソードについて話し合いが行われた。

その後、用意したロールカードを使用し、全体を2チームに分けて、socio dramaを行った。socio dramaでは、提起された話題の家族構成にならい、舅／姑／夫／妻／七五三をする親戚という5つのロールを設定した。ここではかなり違った2つのドラマが演じられた。各自の問題意識が違うのでこのような結果になったのだと思われる。ドラマをお互いに見せ合った後、演じた感想とそれを見てどんな気持ちになったかを話し合ったところ、「家族のあり方」を問題点として捉えた人が多かった。その中でも、嫁・姑に関する各自の経験が多く語られた。例えばフィリピン人Hさんが日本の姑や親戚との関係に悩んでいるという話や、インド人Iさんが姑と良好な関係を築いた経過などについて語られた。その中で、その悩みにアドバイスが出たり共感意見が出たり、さながら国際人生相談のような場になった。

【表3】第6回目

時間	流 れ	備 考
10:55	①担当者からの話題提起 「日本人から見ても、ちょっと変だと思う風習、儀式」	写真
11:05	②話題提起の全体的確認 七五三についての説明	
11:40	③活動 ・日本、イラン、中国、フィリピンの「子どものお祝い」の習慣についての話し合い	スタッフが用意したロールカード
11:40	・ socio drama 1. Aチーム、Bチームに分かれる。 2. ロールカードを読み、内容を確認する。 3. ロールを決める。	
12:00	4. socio dramaを各チームで行う。	
12:10	5. 出来上がった socio dramaをお互いに見せ合う。	
12:40	・ socio dramaを実際にやってみて、チーム同士で見合った感想を述べる。	

この日の活動から出た参加者の発言から、参加者が得たと思われることを挙げる。まず、話題提起者は習慣のくだらなさを主張する方向だったが、socio dramaをやった後は親戚・姑のほうもやむを得ず習慣に従っているだけという論調になり、いろいろな立場に気づいたことである。また、相手チームのドラマを見て、話題提起者以外の参加者もいろいろな立場の気持ちにより気づくきっかけになった点も挙げられる。そして話し合いのところでは各自、自分の経験した「嫁・姑」問題の話題になり、どうやって夫（妻）の親戚と付き合っていくのがいいのかという議論にまで発展した。そこで、自分の国・自分の家族だけでなく、いろいろな国・家族でも似たような問題があることに気づいたのである。

参加者が獲得したものをもとにこの日の活動の結果をまとめると、以下のことが言える。一つは、『嫁姑問題』などの家族問題は、日本特有のものではなく、ユニバーサルなものであるという認識が参加者の間に広まったことである。さらには、各個人が自分だけの悩みだと思っていた問題を共有したり、相手の立場になって考えたりすることによって、問題を抱えている人の心が楽になったり、この場の信頼関係が築きやすくなり、仲間意識の芽生え（共生意識の芽生え）につながったといえる。

4. 結果

次に、本試み全体から得られた結果について述べる。2000年11月から2001年3月にかけての全9回の対話を終えて、2001年4月に参加者にインタビューを行った。このインタビューは、予め質問項目を準備した上で、自由に感想などを述べてもらうものである。そこから「参加者がこの場から何を得たのか」について分析したところ、

参加者が得たものは、「多様性に対する意識」「言語面での気づき」「メンタル・サポート」の3つに分類された。以下、順に説明する。

1. 多様性に対する意識

「多様性に対する意識」には、①異文化に対する発見 ②国で境界線を引く異文化観への疑問 が含まれる。インタビューでの参加者のコメントの例を挙げると、「日本人だから考えが合うということはなく、外国人の意見にかえて共感できることがある」（日本人Gさん・【表2】の記号と一致）というコメントや、「テレビでは画一的な日本人像をイメージしていたが、そうではないことが分かった」（韓国人Aさん）というコメントがある。

2. 言語面での気づき

「言語面での気づき」には、①日本語学習 ②日本語学習への動機付け ③日本語の多様性への寛容 が含まれる。①②は、主に日本語非母語話者が得た結果である。日本語母語話者のほうは、「外国人の日本語に寛容になった」と述べ、③を得た。

3. メンタルサポート

「メンタルサポート」には、①日本語使用に対する自信 ②不安感の払拭と共有 ③他者受容 ④自己開示 ⑤メンバー間の信頼関係 の構築の5つの項目が含まれる。この場が精神的な支えの場になったということは非常に大きな意義であり、本試みの特徴であったといえる。

まず、①日本語使用に対する自信は、「前はいろいろなことが話せなかったが、勇気が出た」（イラン人Dさん）というコメントに代表的に現れている。②不安感の払拭と共有に関しては、「不安が少なくなって、自信がついて子供の通う幼稚園のお母さん達とも話せるようになった」（フィリピン人Hさん）等のコメントがあった。③他者受容については、「最初はHさんの話し方がうるさいと思っていたけど、だんだん彼女を受け入れることができた」（中国人Fさん）等があげられる。④自己開示の姿勢は、「ここで格好つけなくていい、自分らしくできる」（中国人Fさん）や、「日常生活から脱し、ストレス発散の場になった」（日本人Gさん）、「自分の心の中のことを話せた。外で話せなかったことを相談できた」（韓国人Aさん）というコメントに現れている。ただし、③他者受容と④自己開示に対しては、参加者の葛藤もインタビューでみられ、「家族の問題などにどこまで言っているのか分からなくて、戸惑った」（日本人Eさん）と述べた人もいた。⑤メンバー間の信頼関係の構築については、「ここでは、聞く人は愛情を持って一生懸命聞くので、『フレンド』という感じがする」（韓国人Aさん）等の意見があった。

以上、参加者がこの場から得たものは多文化共生意識につながるものが多かったが、参加者の中には、外国人のコメントを日本批判と捉え、不満を感じたと言う人もいた。

5. 考察

次に、なぜ上記のような結果が得られたのかという要因について考察する。（【表4】参照）

1. 「多様性に対する意識」の要因

参加者に「多様性に対する意識」が芽生えた要因としては、①参加者の背景（年代・国籍・文化）が多様であったこと ②同じ国籍の者（今回の場合は日本人）同士の間でも異なる意見・対立した意見が出たこと ③一対一で話し合う機会があり、個人個人での深い接触ができたこと ④テーマに対して一般論で話すのではなく、自分に引きつけて話したり考えたりしたこと ⑤国が異なることで異文化だと思っていた人と強い共感を得たこと ⑥自由に質問できる雰囲気であったことで、お互いのことをよく知ることができたこと が挙げられる。

2. 「言語面での気づき」の要因

参加者の「言語面での気づき」を促した要因としては、次のように考えられる。日本語非母語話者の日本語力に対する自己評価が上がった要因については、①テーマのある話し合いであり、近所の人とのあいさつ・雑談等とは異なる日本語使用の場であったこと ②日本語母語話者が必要以上のフォリナートークをしなかったこと ③自分の意見を述べることを求められる場であったこと が挙げられる。これらのことは、日本語非母語話者

が日常生活とは異なる新しい日本語のインプットを受け、またアウトプットを行う機会が豊富にあったと言い換えられるであろう。日本語母語話者に関しては、④理解し合いたいという気持ちが、非母語話者の日本語に寛容になる姿勢につながった ということが挙げられる。

3. 「メンタルサポート」の要因

参加者の「メンタルサポート」になった要因としては、まず①日本語非母語話者にとって、わからない言葉を「～って何?」と自由に質問できる雰囲気であったこと ②悩みを話せる雰囲気であったこと など、参加者がリラックスできる場が形成されていたことが挙げられる。さらに②に関しては、出された悩みに対しては生産的な方向で、解決に向かって話が進む場であったことである。これは、この場が非日常的で恣意的な利害関係のない集まりであったこと、また大学という場で行われたことが影響しているのではないかと考えられる。また、③悩みと目標を共有することで仲間意識ができたこと ④継続することによって信頼関係が構築されたこと ⑤グループ活動等、スタッフが話しやすさの工夫をしたこと が挙げられる。

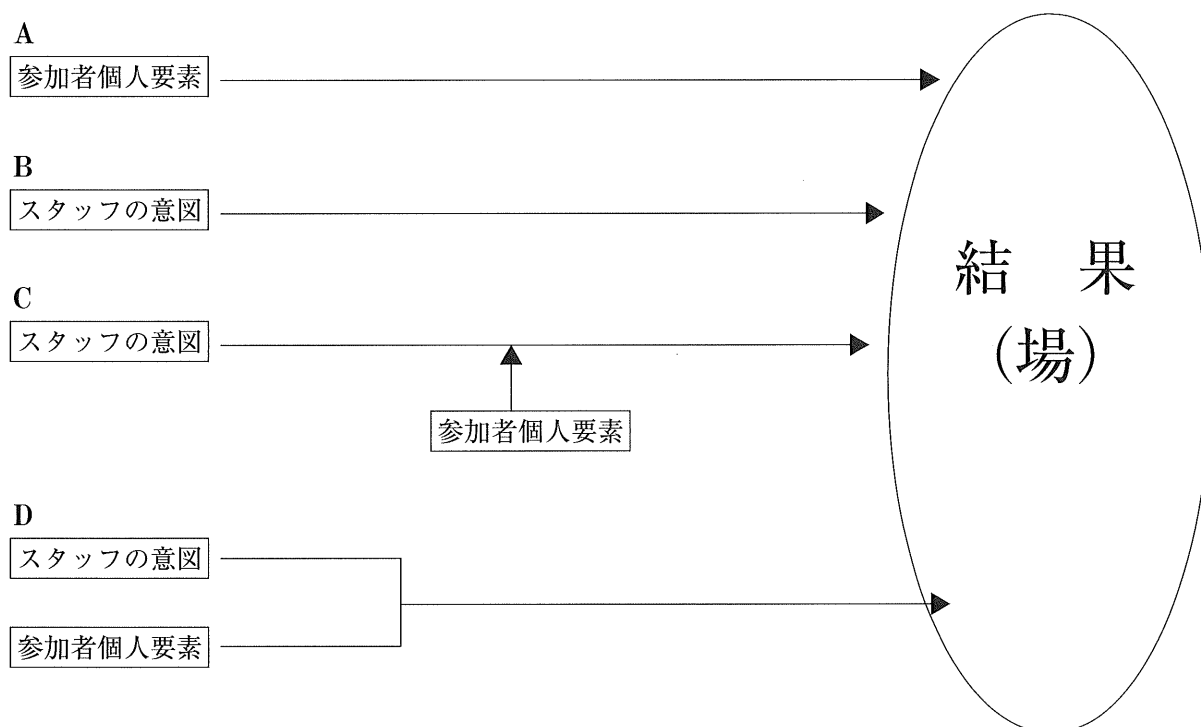
ここで、このような要因をこの場に出現させた原因は何かと考えると、次の4つに分類された。(図1参照)

1つは(A) 参加者個人の要素がこの場に影響を与えて形作るものである。2つ目は(B) スタッフの意図が形作るものである。3つ目は(C) 初めからスタッフが意図していた方向性に参加者個人の要素が加わって形成されたものである。そして最後に、(D) 参加者個人の要素とスタッフの意図とが相互作用的に融合して要因を形成し、参加者が先に報告した「結果」を得たと考えられるものである。このように、A、B、C、Dの4つの要素が絡み合って継続的対話の場が形成されたと考えられる。

【表4】 要因の考察

	分類
1. 多様性に対する意識	
①背景の多様性 (年代、国籍、文化)	A
②日本人の間で異なる意見がほとんどの回で出た	C
③ペアでの話し合いの機会があり、個人個人でより深く接触できた	B
④一般論で話さず、自分に引きつけて話したり考えたりした	B
⑤異文化と思っていた人と強い共感を得た	A
⑥自由に質問できる雰囲気	D
2. 言語面での気づき	
①テーマのある話し合い (近所のあいさつ、雑談とは違う)	A
②日本語母語話者が必要以上のフォリナートークをしなかった	D
③自分の意見が求められる	C
④理解しあいたいという気持ち	A
3. メンタル・サポート	
①自由に質問できる雰囲気	D
②悩みを話せる雰囲気 ・非日常性、恣意的な集まり、利害関係がない、大学という場所 ⇒生産的な話をしようとする雰囲気 ・多様性が受容される	C
③悩みと目標を共有することでできた仲間意識	A
④継続性⇒信頼関係の構築	C
⑤グループ活動等、話しやすさの工夫	B

【図1】



以上、「多文化共生を目指した継続的対話の場の試み」について、「参加者がこの場から何を得たのか」、また「その要因は何か」について分析・考察してきた。結果として、参加者個々人がそれぞれ多様であることを認め合う場となったことに加え、このような対話の場が、言語学習の場にも参加者の精神的なサポートの場にもなり得るという示唆が得られた。スタッフがこの試みを行うにあたって目指した方向性と、参加者の個人の持っていた要素、両方が活かされたことにより、多文化共生を目指す第一歩となったと言えると思う。この試みは現在も継続中であり、今後も地域の多文化共生社会のあり方を探っていきたいと考えている。

(謝辞)

本試みは、お茶の女子大学大学院人間文化研究科日本語教育コースにおける Language Acquisition Research Project (LARP) の一環として行われたものである。

本試みの運営、発表、報告書の作成にあたりましては、指導教官である岡崎暉先生をはじめ、たくさんの方よりご協力、ご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。また、インタビューに協力してくださった参加者の皆様にも、この場を借りてお礼いたします。

注

- 1) If we look beyond the technical difficulties in learning English skills, we find other barriers: emotional blocks, such as lack of confidence; physical barriers due to limited contact with English speakers; or social barriers, including prejudice. (p.27)
- 2) Problem-posing とは、教育は人の生活の問題から出発することを前提とし、対話を通して、①学生の生活に対する批判的な見方を伸ばす ②自尊心を高めるための行動方法を開発する ③生活を改善するための方法である。Problem-posing を日本語教育に取り入れた例として、岡崎 (1993、1996)、池田 (1996)、野元 (2000) などがある。
- 3) ドラマでの役を、自分だったらどうするかを前提に演じてみる。

参考文献

池田玲子 (1996) 「対話的問題提起による異文化理解」『言語文化と日本語教育』19: pp.82-84 お茶の水女子大学日本語文化研究会

新しい日本学の構築Ⅲ

- 岡崎敏雄 (1993) 「学習者のやり取りを通じた教師の成長」『日本語学』12：pp. 31-41 明治書院
- _____ (1996) 「第2章 日本人と外国人が学ぶ日本語・日本文化教育をめぐる考え方」『多言語・多文化の下で 日本人と外国人が学ぶ日本語・日本文化教育』筑波大学日本語・日本文化学類
- 岡崎眸 (2001) 「多言語・多文化を切り開く日本語教育」『多言語・多文化を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学日本語教育コース
- _____他 (2001) 『多言語・多文化を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学日本語教育コース
- 野元弘幸 (2000) 「研究ノート 課題提起型日本語教育の試み－課題提起型日本語学習教材の作成を中心に－」『(東京都立大学) 人文学報』308：pp31-54
- Berry, J. W. (1998) Intercultural Relations in Plural Societies: *Canadian Psychology* vol. 40 (1) pp.12-21
- Berry, J. W. (1997) Immigration, Acculturation, and Adaptation *Applied Psychology: An International Review*, 46 (1), pp.5-68
- Wallerstein, Nina (1983) *Language and Culture in Conflict*. New York: Addison-Wesley.

丸山 樹里 (まるやま じゅり)

1975年生。筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業。お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース2年在籍。専門は第二言語習得。

杉原 由美 (すぎはら ゆみ)

1972年生。広島大学教育学部日本語教育学科卒業。お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース2年在籍。専門は日本語教育。論文に「短期留学生語学研修における言語学習観の変化」(共著、『日白大学高等教育研究』第7号、2001)

中河 和子 (なかがわ かずこ)

お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース2年在籍。専門は第二言語習得。著書に『メディアに描かれる女性像』(共著、桂書房、H4)。口頭研究発表に「技術研修生の現状に関する一考察・富山県の場合」(日本語教育学会北陸地区研究会、H5)

荒木 華英 (あらかい かなえ)

1978年生。金沢大学文学部文学科卒業。お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース2年在籍。専門は日本語教育。

笠原 真美 (かさばら まみ)

1974年生。お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業。立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻博士前期課程1年在籍。専門は多文化共生論・日本語教育。論文に「日系ブラジル人・日本人間のコミュニケーションギャップ考」(『お茶の水地理』第38号、お茶の水地理学会、1997)